第75回長野県図書館大会 第33回北信越地区学校図書館研究大会

2025年（令和7年）11月7日（金）～8日（土）
1日目会場　佐久市内小学校・中学校 佐久平交流センター
2日目会場　佐久平交流センター

大会テーマ
「豊かな学びを支える図書館」　～よりよい未来の創造に向けて～

大会参加者　　2日間 488名

【開会式】

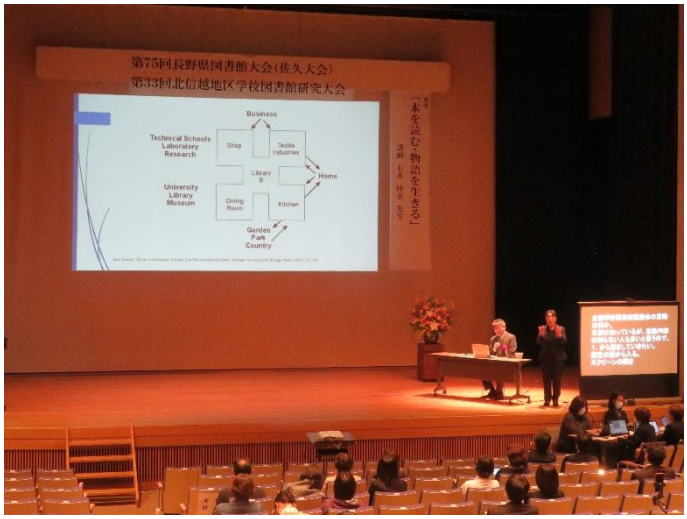
【分科会】

【研究発表】

【講演会】

【実践活動公開】

【全国SLA報告】



【読書バリアフリー展示】

【デジ図書信州】

【移動図書館】

実践活動公開内容

実践活動公開	公開内容
佐久市立 臼田小学校	**メディアセンター版　草笛号～誰かの移動図書館員～** 「草笛号」は、1972 年に運行を開始した移動図書館です。現在も佐久市民の読書環境を支えています。 臼田小学校には、臼田図書館から図書館職員や地域の方々が、子どもたちのために選んだおすすめ本を届けてくれます。６年生の子どもたちはそのお礼として、『ぼくのブックウーマン』に登場する「お礼のレシピ」に代わり、臼田図書館の蔵書やデジ図書信州から地域の方々におすすめしたい本（紙・電子媒体）を選び、パンフレットを作成して臼田図書館に展示します。 当日は、展示場所や方法を考えながらおすすめ本のパンフレットの作成を行います。
佐久市立 中佐都小学校	**自分の好きな本を紹介しよう～ビブリオバトル～** 〇興味を引きつける本の紹介 児童玄関設置のテレビに、新着本の紹介スライドを流しています。教室と離れたところにある図書室への興味を引く工夫です。 〇図書委員会の企画 「雨の日サービス」「しおりコンテスト」等の企画を児童会主体で企画しています。当日は、読み聞かせの会の方が読み聞かせをしてくれます。 〇自分の好きな本をポップや帯を活用しながら紹介し合うビブリオバトルを行い、アウトプットする力や表現力を育みます。
佐久市立 佐久平浅間小学校	**学級の宝活動　～佐久の昔話を伝えよう～** 本校の中核活動「学級の宝活動」。２年４組は～佐久の昔話を伝えよう～をテーマに探究的な学びに取り組んでいます。地域に伝わる昔話を知ることからスタートし、どう伝え残していくかを考えています。本時では、昔話を劇にして伝えようと考えた子どもたちが、いつもお世話になっている読書ボランティアの方の力を借りながら劇を完成させていく場面をご覧いただきます。この活動のために特別に準備されたボランティアではなく、開校当時から図書館教育の中核となる活動として位置づけられ、ご協力いただいているボランティアです。学級担任や図書館司書のみならず、地域とつながる日常の佐久平浅間小学校の子どもたちの様子をご覧ください。
佐久市立 臼田中学校	**図書委員会　生徒集会での発表** 本校では、生徒会図書委員会が生徒の読書生活の向上に向けて、大変意欲的で活発な活動を展開しており、当日は、図書委員会の生徒集会での発表場面をご覧いただく予定です。内容は「あなたが幸福(しあわせ)を感じるのはどんな時？」というテーマを設け、図書委員会や先生方からの幸せをテーマにしたおすすめ本の紹介、「幸福の王子」（オスカー・ワイルド作)の読み聞かせ(図書委員による朗読劇)を行います。他にも、多読者ランキング、臼中生の人気本ランキングの紹介も行う予定です。本の貸し出し数増加に向けて本校で日常的に行っている図書委員会の活動の一端を紹介します。
佐久市立 浅間中学校	**図書館の魅力発信「読書フェア」・おすすめの本を紹介しよう「ビブリオバトル」** 〇図書委員会では、本の貸出・返却等といった当番活動や、学級での朝読書の呼びかけを日常活動として行っています。また、「本に親しむ機会をつくり、学校生活をより豊かなものにしてほしい」という願いをもって、年２回の「読書フェア」を行い、図書委員が、おすすめ本の POP を作成して展示するなどしています。当日は、「読書フェア」中の図書館や委員会活動の様子を公開します。 〇国語では、学校図書館にある本の中から自分のおすすめ本を探し、その本を紹介する「ビブリオバトル」を行います。どの本が一番読みたくなったかを投票し、チャンプ本を決めます。当日は、授業の様子を映像・写真で公開します。

【研究発表】

「未来への結び目をつくる　～ワークショップ型図書館研修の試み～」

長野県野沢南高等学校　学校司書　朝倉久美

１．はじめに

本大会のテーマである「豊かな学びを支える図書館 ～よりよい未来の創造に向けて～」は、人々の生涯にわたる“学びの接続”を意識し、人生のあらゆるステージに寄り添うプラットフォームとしての図書館像を思い描いたものである。学校図書館と公共図書館が館種を越えて目的を共有し、理解を深め合うべく、分科会を学校種別ではなくテーマ横断型とした主な理由もそこにある。とはいえ、大会で参加できるコンテンツには限りがあり、参加者属性によってコミュニティが分断されがちなことは否めない。

そこで全体会では、公共図書館と学校図書館の職員が同じテーブルで学び合う研修事例について報告する。本大会の開催地である長野県佐久地域で継続的に行われている図書館職員研修（図書館協会佐久支部研修および佐久市小中学校司書研修）を題材に、参加者同士で意見を交わし合う機会としたい。

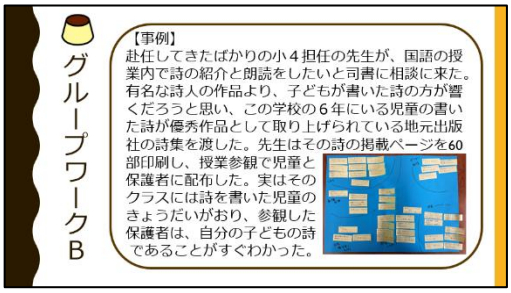
２．「体験」を通して「実感」ある学びを

人はいつも学びの途中にある。学校教育・家庭教育・社会教育の結び目としての機能を持つのが図書館であり、学校図書館と公共図書館が知のリレーを行うことで、あらゆる層の利用者の未来を思い描くことができる。そのために必要なのが、図書館関係職員（司書教諭含む教員、司書、行政職員、学校長、公共図書館長など）がそれぞれの立場の強みを活かし、相互理解を深めることであろう。

先述した研修設計を請け負うにあたり、主催者との対話を重ねる中で、受講者同士が試行錯誤し、自身の体験を児童生徒に還元できるような場づくりを行うことが最善であると考えた。また、図書館活用支援者としての専門性を高めるにつれ、職員自身もまた学習者であるという意識が薄れがちになるという課題も浮き彫りになった。そこで、県立長野県図書館の児童リテラシープログラムと高校における探究学習支援を編み直し、図書館に関わる方々の好奇心を刺激するようなワークショップの開発を試みた。近年実施した研修内容を振り返り、将来的な学びを支える図書館連携のあり方について再考する。

図書館協会研修

小中学校司書研修



高校探究ガイダンス

石井睦美氏　講演会　概要

「本を読む・物語を生きる」をテーマに、自身の読書と創作の来歴、言葉と物語の価値、他者理解と想像力の重要性を中心に語っていただいた。

【近況・進捗】
読書体験の原点
幼少期、父と室内で絵や読書中心の生活を送り、物語へ深く没入する感覚を早期に獲得。
高校入学前の高校からの課題図書を契機に詩人・立原道造に傾倒。現国の野地安伯教諭による短詩の導入授業で言葉の感受性が涵養。
大学で中村真一郎氏と出会い、資料探索・編集実務（雑誌ユリイカ）へ接続。作家・詩人たちとの交流が創作動機を強化。

【創作と作品】
自伝的記憶を核にした短編「パパはステキな男のおばさん」など、日常の微細感情を丹念に描く作風を位置づけ。
谷川俊太郎、田辺聖子らの言葉を参照し、「全腕力」で書く姿勢＝人生経験の総体が作品に沈殿するという創作観を再確認。

【実務的示唆（図書館・教育現場)】
高校段階で文学教材が減少する現況を懸念。説明文と並行し物語読解で想像力・共感力を育む必要性を強調。
読書は訓練であり、段階的な習熟（音楽練習の比喩）を要する。速読・要約視聴は「筋」理解に留まり、物語体験にいたらない。
紙の本の「手触り・記憶の容器」としての価値を再評価。電子の利便と併存しつつ、実体験を媒介に読書文化を継承。

〈キーワード整理〉
言葉と物語の効用
想像力の二層
再現的想像（テクストから具体像を立ち上げる）
生成的想像（共感の先に新たな世界像を構築）
他者理解と民主主義
木村草太氏の問題提起を引用
・数学リテラシー偏重に対し、文学軽視は他者理解の希薄化を招く

【事例提示（読書がもたらす変容)】
絵本『むこうがわのあのこ』
分断の柵を越える子どもの柔軟性のある相互理解の萌芽。
詩集『空が青いから白をえらんだのです　奈良少年刑務所詩集』
言葉の学びが内省と謝罪の表出（「ごめんなさい、母さん」）を可能にする過程。

【人間と AI の差異】
生成物の「〜風」と作家の全人生が刻印された作品との差。人間の心・魂に根ざす表現が感動の核である。

【読書文化継承の実務課題】
子どもの非読傾向への現場の危機感。ゲーム・動画の魅力を前提に、物語読解のハードルを段階設計と推薦や手渡しで下げる。
国語授業、学校図書室、公共図書館、私蔵本棚への連携導線を太くし、反復読書と所有感で定着を図る。